平成 28 年度「土砂災害防止に関する絵画・ 作文」作文小学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「 大好きな熊本 」

宮崎県 日之影町立宮水小学校 5年 中山（なかやま） 樹莉（じゅり）

4月 14 日、ぼくは、高千穂の父の事務所にいた。高千穂でさえ大きくゆれた。と、同時に周りの人たちのけい帯の地しん速報のあの不気味な音が一気に鳴りひびいた。母たちのけい帯には遠い所に住む知り合いからのメールがたくさんきた。何が起きたのかわけが分からず、急いで帰ってテレビをつけた。ぼくの知っている熊本に大変な事が起きていると知った。余しんのたびに鳴りひびくあの不気味な音が、今でもわすれられない。余しんでねむれない夜が過ぎ、次にまた、ショックなニュースが飛びこんできた。

流れ出た土砂であそ大橋がこわれたということと、たわら山トンネルがくずれて、熊本市内に行くための通り慣れた道がなくなったということだ。どうにもならない自然の力のすごさにぼくは、もうこれ以上、大好きな熊本をこわさないで下さいと、たくさん願った。

すぐに、ボランテイア活動が始まった。それを見たぼくは、自分にも何かできないかと思った。いつもの生活が当たり前のことだと思っていたぼくは、すぐに思いつかなかった。そこで母に聞くと、

「役場で救えん物資を受け付けるらしいからお母さんもトイレットペーパーやカップメン、紙オムツを持って行ったよ。」

と聞き、何が必要かを調べて、ぼくは、

「家で使わない新しいタオルや、トイレットペーパー、たくさん集めて送ろうよ。」

と、声をかけた。困っている人たちの力に少しでもなれたらいいなと思った。

熊本大地しんから、約2ヶ月後、ぼくは、家族の用事で熊本に行くことになった。正直に言うと、また地しんが来るのでは、と不安だった。通り慣れた道は、全て通行止めの立て札があり、道路や田んぼ、畑にはきれつが入り、大きなだん差ができていた。ましきの町は、ブルーシートでおおわれた家がたくさんあった。かわらは落ち、かたむき、今にもつぶれそうな家もたくさんあった。その時、こしの曲がったおじいちゃん、おばあちゃんが2ヶ月たったあの日も、住み慣れた家だけど、住めない家の周りをかた付けているすがたに、ぼくも何かしてあげたいと思った。

次に目にしたのは、グランメッセのちゅう車場にはられたたくさんのテントだ。暑い日も雨の日も、ここで過ごしていると思うと、ぼくは、自分の家に住める事、電気や水も自由に使えることに感謝しなければいけないと思った。

ぼくは、1年生の時、スポーツ少年団でつ波でつらい思いをした、宮城県バレーボールクラブの人たちと交流した経験があった。練習したくても、体育館も練習道具も流され、大好きだったかんとくも亡くなっていたことを思い出した。今回の熊本でも、きっと同じように苦しんでいる小学生がいるはずだと思った。今すぐには、かなわないかもしれないけど、ぼくがしてあげられる事は、大好きなスポーツで笑顔にしてあげる事なのかもしれないと思った。

ぼくは、2ヶ月ぶりに行った熊本でたくさんの旗を見た。その中でも、一番心に残った言葉がある。

「前を向け！光はさしている！」

前向きにがんばる熊本、たくましく、力強さを感じた。

今回の地しんを体験し、不安な時にたくましく救助に向かう自衛隊やレスキュー隊のように、ぼくも人の命を救える仕事をしたいと思うようになった。

最後に今もがんばっている熊本のみなさんへ。大好きな熊本が元通りにもどること応えんしています。暑い日が続きます。お体、大切にして下さい。